「スピングラスのダイナミックスについて」 - 相 転 移 点 近 傍 -

東大 理 鈴 木 増 雄

スピングラス転移という概念は、もともと局所的なスピンの時間変化が極度に遅くなった状態として把えられたものである^{1),2)}。即ち、時間軸に関する長距離秩序が現れる転移であるから、その本質を理解するには、それを動的に扱わねばならないことは必然的である。

研究会では,主としてレヴューを行った。現在のところ,pureな系での動的分子場理論(鈴木・久保 3)をランダムな系に拡張した仕事(Kinzel-Fischer 4)が出ており,これによるとpure な場合と同様の臨界緩和現象が起る。また,Kirkpatrickと Sherrington 5)は,Ref. 3 の分子場理論を,オンサーガの reaction fieldを入れたものに改良して,Ref. 4 とは異なり,もっと遅い臨界緩和指数を求めた。その他,同様の試みがなされている 6)で、私自身は,静的な現象論 8)を動的に拡張する試みともう一つは,ミクロな TDGL 模型又は非線型ランジュバン方程式 9)の方法で本質を解明しようと努力している段階で,まだあまり確定的な結果は出ていないが,現在言えることは,スピングラスでは, T_{8G} 以外でも,広く臨界緩和現象がみられる可能性があることである 10)。 詳しくは,次の機会に報告したい。

参考文献

- 1) S. F. Edwards and P. W. Anderson, J. Phys. F5 (1975) 965.
- 2) S. F. Edwards and P. W. Anderson, J. Phys. F6 (1976) 1927.
- 3) M. Suzuki and R. Kubo, J. Phys. Soc. (Japan) 24, (1968) 51.
- 4) W. Kinzel and K. H. Fischer, Solid State Comm. 23 (1977) 687.
- 5) S. Kirkpatrick and D. Sherington, Phys. Rev. B18 (1978) in press.
- 6) S.-k Ma and J. Rudnick, Phys. Rev. Lett. 40 (1978) 589.

ランダムスピン系の相転移

- 7) J. A. Hertz and R. A. Klemm, Phys. Rev. Lett. 40 (1978) 1397.
- 8) M. Suzuki, Prog. Theor. Phys. 58 (1977) 1151.
- 9) M. Suzuki, Phys. Letters A (in press).
- 10) M. Suzuki, to be submitted to Prog. Theor. Phys.

ランダムスピン系でのスピンのダイナミックス - 低温極限(スピン波)-

北大 理 高 山 一

1. RKKY金属スピングラス (MSG), Edwards-Anderson 模型,及び Mattis模型での平衡配位 (EC) とそれからの素励起に関する計算機実験^{1,2)}の紹介。

Mattis 模型では一組のランダム変数に対して唯一の EC が定まり、それからの素励起は ランダムな XY 模型のものに等しい。 MSG と EA 模型では非局在モードは存在しているが、 きちんとした分散関係 $(ex. \omega_R = ck)$ はない。

2. MSGスピン波に関するhydrodynamic 理論³⁾の紹介。

多くの EC の存在が予想されるが,各々の EC は他の EC と充分な自由エネルギー障壁 で隔てられていると仮定し,1つの EC からの素励起を議論する。分散関係は,

$$\omega_{\rm R} = \pm \gamma \left(\frac{\rho_{\rm S}}{\chi}\right)^{1/2} k - \frac{1}{2} i \left(\frac{K}{\chi} + \gamma \rho_{\rm S} \zeta\right) k^2$$

但し $\gamma=g\mu_{\rm B}$, K, ζ は適当な散逸係数。 MSG での上述の仮定, stiffness 定数 $\rho_{\rm S}$ の 大きさなどが問題となる。

- 3. MSGスピン波に関する量子力学的アプローチ。
- 2. と同じ仮定のもとに、1つの EC(反強磁性体のネール状態に対応)に対して Holstein-Primakoff 変換で導入されるボーズ演算子のグリーン関数 $^{4)}$ を調べる。 その際相互作用 J_{ij} と EC における S_i と S_j のつくる方向余弦 z_{ij} に適当な相関(その程度を無次元量 $\eta_{\rm C}$ で表す)を仮定すると